クリスチャン・ヴォルフの定義の説について

——ヴォルフ研究、其の二——

細川董

一

我々は、さきにクリスチャン・ヴォルフの哲學用語について、ラテン語の飜譯が日常ドイツ語による新造語の作成と等しき事實を、彼の明晰、判明な存在論的概念確立の必要性のもとに考察したのであつたが、その際、我々の吟味の目的は、ヴォルフ用語の單に造語上の歴史的開陳を一義的目的とするものではなくて、明晰、判明な概念が、ヴォルフの學的存在論 ontologia artificialis の體系構成の根源的要請である事の理論的根據を、彼のプロレゴメナに見出す事であり、就中、重大な事は、我々の吟味に於いて、若し我々が、あくまでも、ヴォルフに矛盾を許さないならば、概念のみが證明をまぬかれ得る筈はないという結論、即ち、命題原理のみならず、それ以前に、用語の判明な定義にも、證明法が適用さるべきであるという事、尠くとも、このような姿にヴォルフの立場を復元し得ると結論した事であつた。(一)

今やこの復元の可能性を、ヴォルフ自身の定義の説で、吟味する事が、我々の次の課題となる。ところで、さきに、ヴォルフでは、判明な概念の證明の原理として、存在論の原理が登場するのを、我々は見たのであつたが、存在論の前提として優先すべき判明な概念定義は、存在論の一切の命題構成（存在論の原理をも含めて）の前提でなければならぬにも拘らず、これの證明に、更に存在の原理を用いねばならない事は、明白な論理的惡循環を露呈していると見受けられ、この事は更に、認識の原理と存在の原理の惡循環をさえも豫想せしめるのである。

それというのも、ヴォルフは、この混亂の汚名からのがれる爲に、存在論の原理をも含めて、一切の證明の原理を、認識の原理と呼ぶという企圖を存在論でなしている。即ち、彼は、「何かある命題の證明を始めるすべての命題は、認識の原理である」(二)といっている。さきに述べた惡循環が、ヴォルフのものでないために、ヴォルフにとつて明晰、判明な概念の證明の原理は、もはや存在の原理であつてはならず、たとえ、それが存在の原

理と同じものであろうとも、尠くとも、存在の原理の名で呼ばるべきものであつてはならなかつた譯であり、彼によつて、證明の原理は、すべて、實際、認識の原理と呼ばれるに到つたのであろうとも考えられる。これのみを見るならば、明らかにヴォルフは、難點を回避しようとして、馬鹿げた形式主義に陥入つているかに見える。當の難點は、勿論このような形式主義で片附けられうる性質のものでもないし、ヴォルフ自身の企圖も又、これに止まるものでない事はやがて我々の見る如く彼の Logica で、明白となるであろう。

そもそも、概念定義とは、ライプニッツでは、複合概念について可能であり、定義とは、複合概念を、單純概念に分析する事であつて、定義可能性には、單純概念の兩立命題、即ち綜合判斷の可能性が豫想される。逆にいえば、定義不可能な單純觀念を、公理、公準と共に一次的眞理として認めるのがライプニッツの立場であり、でないと定義は惡循環に陥入らざるを得ないとは、已にラッセルがそのライプニッツ研究に於いていみじくも指摘せる處である。[四]

ところが、ライプニッツとは反對に、ヴォルフは、私の見るところでは、定義され得た概念を、公理、公準とならべて考えているのである。即ち、彼は Logica § 562 で、どんなものが證明の原理たりうるか、と自問して、疑うべからざる經驗、證明された命題、公理、と共に、眞つ先に定義を擧げている。[四] ヴォルフが、ライプニッツの如くに、定義し得ない單純概念を公理と共に假定する事なく、此樣に、定義しうる概念を、公理と共にならべているという事は、惡循環を覺悟の上の事なのかどうか。この問題は、後に見る如く、事實、ヴォルフは百も承知の上なのである。（本論文、第三節に於ける Disc. praelim. § 119 の引用前後參照）と同時に、我々は、前論文で、ヴォルフに於いては、概念の證明を一次的に必要と見たが、今やこの證明さるべき概念こそは、窮極的には、單純概念でなければならなかつた事を見出すのである。而も、私の知る限り、ヴォルフは、どこにも、單純概念は證明し得ぬ（定義し得ぬ）とはいつていない。それどころか、Logica. De Definitionibus の章 § 107 に於いて、單純概念を、判明な類と種の概念であると述べ、§ 172 § 173 § 174. に於いて、夫々事物に内在するものが充分に算え上げられる事によつて定義されうる單純概念の定義の仕方について述べているのを見出すのである。[五] 定義可能性の眞僞の吟味は後にゆづるとして、とにかく、こゝでは單純概念といえども、定義可能とヴォルフは考えたのだと我々は見て論をすゝめてよかろう。

そこで、證明は、命題にのみ適用さるべきであつて概念に適用さるべきでない、という考えは、ライプニッツのものではあつても、もはや決してヴォルフのものではないと考えられる事となり、證明が概念に適用さるべきであるという我々の豫想は、事物として、今やヴォルフの Logica を貫いて終始重要な論を成している定義の說[六]（敢て私はこう呼ぶ）に於いて的中するのを見出すであろう。

さて、我々は、先づ、何故にこの定義の說が論理學で取扱わ

れねばならなかつたかの理由を、次に問う事から始めよう。

註（一）哲學研究、第四百五十號所載、拙稿「クリスチャン・ヴォルフに於ける哲學用語について」、特に、第六節、參照。

（二）Ontologia § 876 not. Omnes adeo proposiones, quae ingrediuntur demonstrationem alicujus propositionis, sunt principia cognoscendi.

（三）Bertrand Russell, A critical exposition of the philosophy of Leibniz. p. 18.

（四）Quaenam sint principia demonstrandi? Quoniam in demonstratione non utimur praemissis, nisi definitionibus, experientiis indubitatis, axiomatis, & propositionibus jam demonstratis.

（五）そこでは、他と區別するのに充分な、事物に内在する徴標が多くなく、少くなく、次の三つについて算え上げられる事によつて、類と種の完全な決定的概念を持つ三方法とされる。その三つとは、一、本質、二、屬性、三、樣相と關係の可能性、の三つとされる。私はここで、單純概念は定義可能とヴォルフが考えたという事實のみを指摘しているのであつて、その可能性そのものの吟味と評價は後述する。（本論文五節以下參照）

（六）定義についてDe Definitionibus (Caput IV) は § 152 Definitionis definitio から始まり、一應 § 197 で終つているが、主として、本論文、第五節で我々の展開する如く、定義についての彼の重要な理論と實踐は、Logica 全篇にまたがつて居り、（§ 303, § 669～§ 709, § 710～§ 724～§ 734～§ 742, § 836, § 947～§ 949～§ 952, § 953～§ 955, § 956, § 1141 等參照）此事は、その理由として定義の理論と實踐は精神のすべての働きの基礎をなすべきだから、一箇所だけで述べてすませる譯にゆくものではないとさえ彼が明言している（§197）のを見てもうなづける。それ故、私は、これらすべての定義の理論と實踐とを總稱して、私はヴォルフの定義の說と呼ぶ事とした。

二

そもそも、Logica こそが證明の場所を提供すると語られるのは、如何なる理由によつてであるか。

先に指摘した如く、概念が存在の原理によつて證明されるという事は、尠くとも、存在論に於いては矛盾した陳述であつたのである。さればこそ、一方、存在論ですべてのものは證明されねばならないと語りつつも存在論は、根源的な意味で、證明の場所たり得なかつたのである。かくして、證明さるべき概念という思考は存在論からははみ出し、概念が更にいくつかの命題に分解され、證明さるべしという議論は、論理學に於いて始めてその場所を得るのである。かくして、ヴォルフは、「生來持つて生れた理性により、嚴密に、論理學に於いて、存在論の一つ一つが證明されさえすれば、存在論は論理學に優先する」といつた形で、論理學が證明の場所として存在論に先行する事

を言明している。

我々は定義こそ、明晰、判明な概念證明の場所といい得る時、眞に Logica が存在論に優先して證明の場所となろう。と考えるところで、かかる明晰、判明な概念の實存の可能性が證明される場所に、よくヴォルフの定義の說が堪えうるかを吟味せねばならぬが、これに先立つて、我々は、この問題に關聯して、論理學の原理と、存在論の原理との關係を檢討しておく事が賢明であろう。

先に指摘した如く、ヴォルフは、存在の原理を認識の原理と呼ぶという企圖に呼應して、「論理學ですべてが證明さるべきならば、その原理は存在論より借りらるべし」(Disc. praelim. §89)[五] と述べ論理學の證明の原理を存在論から借りてくるという計畫的な一策を弄する。これは又「存在論の原理は論理學そのものにより、いと容易に說明される。この原理こそ論理學の問題なのだ」[六]という陳述とも符合するものであろう。

ところで、ヴォルフでは、事實性を拔きにした推論のみによる或る命題のみによる或る命題の證明は、論推 probatio[七] として、事實性を含む論證 demonstratio から區別されていると思われる。[八] そこで、定義の證明は、それが存在論的概念の證明である限りに於いては、論推 probatio ではなく、絕對的に論證 demonstratio に屬さなければならなかつた筈である。

然し我々は、その原理が、借りて來られたものであるが故に、依然として、存在の原理であるとヴォルフが力說したとしても、Logica が證明の場所である限り、それは命題證明の原理、卽ち認識の原理である事を否定する譯にはゆかぬのではないか。存在の原理が存在の原理である事を止めて、單なる認識の原理になつてしまう時、そこに論證 demonstratio のあり得ない事は自明であろう。

本論文第一節に於いて我々に馬鹿げた形式主義と非難された難點は、ここに到つて、如何にヴォルフ自身により克服されたか。そのためには、存在性に於いて存在の原理であり、その働らきに於いて認識の原理である如き原理が今や必要とされる。が、果してこのような原理の存在が思考しうるであろうか。

私は、此の樣な思考を可能ならしめるものこそ、ヴォルフ自身の孕める理性 pregnantes ratio[九] という言葉でいいあらわされる理性に見出せるのではないかと考える。彼に於いて、孕める理性とは、存在の原理を證明の原理として、論理學の規則と共に孕む處に論理學の存在論に對する優先性を保持する理性なのであつた。もともと彼の存在論の原理は、誰しも理性に於いて認めざるを得ないものとして一つの命題形成に表わしたものであつた事[十]をここで我には想起せざるを得ないが、今この問題を詳論し、孕める理性の是非を決する事は出來ない。存在の原理そのものの證明と役割りは研究其の三以下にゆづるとして、ただ、今我々は、結論的に、ヴォルフの存在の原理と認識の原理の混同性をとがめる事を止め、むしろ、存在の原理と認識の原理との同一性を强調する處に、ヴォルフを救う道がひらけゆくと豫想す事を以つて、今の處は滿足すべきではないであろうか。

さきに第一節で我々が見出した惡循環の解決を、ヴォルフが論理學に見出たという事を、正當と見做し得たとして、次の問題點は、果して彼の定義の說そのものが、右のヴォルフの孕んだ理性に我々の見出した、存在の原理＝認識の原理、という圖式を出發點として、現實に、所謂、惡循環から如何にして脫し得たか、が次に我々の吟味の對象となる。

註 (一) Ontologiae (ac Psychologiae) quaedam principia explicanda nobis sunt in Logica, ut demonstrationi sit locus (Logica §. 2)

(二) Ontologia § 2. qure in Ontologia proponuntur, demonstranda sunt.

(三) Logica § 947. Resolutio definitionis nominalis.

(四) Disc. praelim. § 90. Ontologia igitur & Psychotogia Logicam praecedere debent, si in ea singula rigolose demonstranda, rationibus regularum genuinis allatis.

(五) Disc. praelim § 89. Quodsi in Logica omnia demonstranda, petenda sunt principia ex Ontologia.

(六) Disc. praelim. § 91. Cur Antor Logicam primo omnium loco pertraktavit. 參照。

(七) demonstratio を論證としたに對して、prebatio を論推と譯した。

(八) Logica § 588 參照。

(九) Logica § 2. not. Quamobrem cum pregnantes rationes urgeant, ut Logica Ontologiae & Psychologiae praemittatur,……

(十) Ontologia § 28 Tenor principi contradiktionis. 參照。

三

前節で、我々は、ヴォルフに於いて、定義は概念證明の場所である事を指摘した。然し一方、それが證明の場所であるという事は、單に他と區別された領域を劃するが故に一つの場所であるばかりではなく、更に一つの秩序 ordo をもつたものであつた事、卽ち、概念證明に對して秩序 ordo を與えるが故に、一つの場所であつた事が、次に吟味され得よう。

この定義の秩序 ordo についてヴォルフは、大凡次の如く語つている。哲學に於いては、新しく定義する用語は、已に定義のすんだ用語で說明されねばならぬが、實際問題としては、定義を始める用語が充分說明されていないか、或いは又、次の箇所で說明されるかの二つの場合が問題になつてくる。然し前者の場合の如く、不充分な定義の用語を用いる事は許るされないから、問題は、後者の場合にしぼられる。卽ち、先立つ定義を始める用語が後の定義によつて、說明される場合である。この結果、どうしても矛盾した事にならざるを得ぬ事が明らかにされる。卽ち、哲學に於いては、何ら疑わしきものは我々に殘つていないという風に、あらゆる形の確實さに向つて努力すべきであるから、前の定義を始める時に用いた用語が、後の定義によつて說明されるという場合には、先の先では、いづれそのような障害がとりのぞかれる事がわかつていても、永らく骨折つ

て、遂に探ね明かさねばならぬといつた風に、面倒な事になる。正に恐らく惡循環となる事であろうと、ヴォルフは述べ、惡循環を認めているが、然し、だからといつて、讀者にとつて、あるべき確實さに反するような疑念が生まれてはこまるのであつて、この惡循環の確實さへの探求に於いては、決して不平を起こしてはならないといつている。何人も、次の定義を始める用語が、已に前に說明されたものであるという事が、如何なる場合にも先決問題である事を否定する者はないであろうと附言している。(Disc. praelim. § 119)

ここでヴォルフは、定義の惡循環を認めつつも、それが決して絕望的なるものと考えるべきでなく、有限な人間の認識に期待して、その克服を說いている。卽ち、定義が一回的なる決定によるものではなく、より確實な秩序 ordo へと進まねばならず、どれだけが正しいかの確實さの限定へ向わねばならぬと力說しているのであるが、この點に我々は注目すると共に、さきに明らかにした、存在の原理と認識の原理との同一性を、あわせ考える事によつて、我々は、定義の辨證法といつたものを、ヴォルフに見出しうるのではないか。

たまたま、Heinz Heimsoeth は近時、そのカント研究に於いて、ヴォルフにまでさかのぼり、ヴォルフ存在論の主要なカテゴリーの開陳を試みそこに、ヘーゲル辨證法のカテゴリーを見ようという努力が見られるのは事實である。(一)

ハイムゼートは、ヴォルフの「Nihilum dicimus, cui nulla respondet notio.(何らの概念が相當しないものを無と我々は呼ぶ)」という、Ontologia § 57 の無の定義に着目することにより、矛盾の原理はヴォルフ存在論の第一原理であるが、この出發點の逆說的な結末は、ヴォルフに於いて、存在 ens 乃至あるもの aliquid の前に、存在論の第一の用語として、無 nihilum をさし出すという事となり、この無というカテゴリーの意味こそは、ヘーゲルにあつては、「普遍的存在」に次ぐ第二の存在を用意するものだと述べ、更に、存在及びすべての存在物の認識のための根本可能性として、無を追い出すというヴォルフに由來する考え方は、ヘーゲルの第二の根本カテゴリーに於いて大きな役割を果しているのだと述べている。なお又、ヘーゲルの論理學では、純粹存在「reines Seyn」「Seyn überhaupt」が出發點をなしているのに、ヴォルフでは「Satz des Widerspruchs als dem axioma maxime generalis」を出發點としたとハイムゼートが指摘する時、(二)更に、充分には、我々は、存在論の公理としての矛盾律のみならず、我々が見出した處に從つて、存在の原理＝認識の原理、として、矛盾の原理を先づ定義の辨證法の出發點に見出す事が出來るのではないか。かく見てこそ、ヴォルフの概念定義を辨證法的なるものとして充分に理解し得ると私は考えるのである。

卽ち、ハイムゼートの着目した、ヴォルフの無の定義を更によく見てみると、この言表は、明らかに、概念が存在に明晰、判明に照應する處に、定義の辨證法が完成されるものである事を開陳していると、附加して考えてみる必要があると思われる。卽ち、定義とは、有限な認識が、概念から無を徐去してゆ

く過程としてえがかれているのである。何故ならヴォルフによれば、無は何らの概念が相當しないが故である。卽ち、ヴォルフの無 nihilum は存在に對する無であるよりもむしろ、概念に對する無である事を考慮すべきである。ハイムゼートはこの點を見落していると私は考えるのである。(三) かくして、若し、ハイムゼートのいう如く、ヴォルフにヘーゲルの論理のカテゴリーを見出しうるとするならば、それは正しくは概念定義の領域に限定せねばならぬと私は思う。

定義に伴う惡循環が原理的に救われる認識的根據は、大凡、右の如く豫想されるが、現にそれは定義可能性の證明としての彼の定義の說そのものに於いて如何に實現されうるかが次に吟味さるべきであろう。

註 (一) Heinz Heimsoeth, Studien zur Philosophie Immanuel Kants. Köln 1956. S. 9 & not. 參照。

(二) 同書 S. 6 S. 7

(三) ハイムゼートは、ヴォルフの無について、無は初期の作品で充足理由律との關係で定義されている、卽ち、Ontologia § 28 で「存在しもせず、可能でもないものを無とよぶ」と。§ 61 でヴォルフは數學者として ex nihilo nihil fit. という原理を、明白には nihilorum repititione……non fieri aliquid となしているが、§ 66 では、これとちがつて、無は或るものの原因たり得ぬと公式化している點を、前揭書、S. 9 not. で指摘しているに止まる。

四

ヴォルフは、Logica で先づ、定義に、本質的定義 definitio essentialis と偶然的定義 definitio accidentalis とを區別して考えている。卽ち、前者は本質によつて決定される定義であり、後者は、樣相の可能性と關係の可能性とによつて決定される定義だとヴォルフはなしている。(Logica § 192) ところで、この樣な論理學に於ける區分は、果して決定的な意味をもつものであるかどうかを吟味する時、我々は、そうでない事を、次に知るのである。

今我々は、ここで、本質、樣相、關係の三つの概念につき、ヴォルフに從つて (Logica § 64) 存在論に言及し、その對置や由來を詳論すべき場所ではない。今我々に問題なのは、本質的可能性に對する樣相と關係との定立ではなくて、本質に對する樣相の可能性と關係の可能性との定義の說における認識論的差異如何の吟味である。それというのも卽ち、Logica § 155 に於いて、一方、存在の本質は、存在に主內的な可能性 possibilitas intrinseca により成立つ事が示されるのであるが、一方、これに對して樣相と關係の可能性は一體、主內的であるか、主外的であるのか。この點についてヴォルフの考え方を檢討せねばならぬ。

さて、ヴォルフが、Logica § 156 で、樣相と關係の可能性につき、次の如く述べている點は注目に値する。「樣相と關係については、他の外的な可能性に加えて、いわば、事物に內在す

ると考えられる可能性があると思われる。というのも、樣相そのものは、現に內在するものとしては、存在の本質によつて決定されないけれども、所與の事物が、その事物の所與の樣相に、かない得るというような、存在の本質的可能性によつて、樣相は決定されるのである。若し、あなたが、この事を否定し、樣相のすべての決定を、全く、外的原理によつて、得られると信じ、その樣相を受け入れる可能性を、その主體中に豫想せず、その事物の原因となるものならどんな外的原因でも、その樣相を着せうるとすれば、例えば、燒燃が、木でも石でもを、金屬同樣、とかすこととなる筈であるが、これは不合理であり、經驗に反する。存在の本質によつて決定されず、本質に內在しない關係の可能性についても又、その生きた可能性を主體から切り離せないのは、樣相の可能性の場合と丁度同じである」ここに、偶然的定義で定義されうる樣相と關係の可能性は、名目的には、たとえ主外的可能性とよばれようとも、本質的定義の場合同樣內在的可能性であるという點で、根本的にかわらないと考えられる。どういうものとして、存在し得たかという事でなく、どういう風に存在しうる可能性を持つかという點にのみ定義は、認識の原理たるべく着目さるべきであつたと見られる。という事は、定義としては、偶然的なる定義も又、樣相そのものを徐外し[二]、內在的な可能性だけを着目する事によつて成立すべきであるから、本質的定義と偶然的定義の區分は、彼の定義の說に於いては、本質的な重要さを持たないという事を暴露しているのではないかと考えられる譯である。

これ卽ち、「定義が本質的であれ、偶然的であれ、定義されたものが可能かどうか定義から了解されない時、本質的定義も、偶然的定義も共に名目的なものに止まる」と、Logica § 193 で、ヴォルフが斷言するに到る所以であると私は考える。

ところで、ライプニッツは、理性の眞理（必然的眞理）と、事實の眞理（偶然的眞理）とを峻別して、前者の原理に、同一律、後者の原理に理由律を配し、卽ち、前者を分析的眞理の領域として、算術等の數學的眞理を考えているが、1＋2＝3 なる命題も又、1と2との兩立性の判斷（綜合判斷）の必要なる事は、カントの發見として、ラッセルの指摘する處であるが[三]、此事は、カントを待つまでもなく、已に、ヴォルフに於いては、次の如く當然の事であつた事を、我々は見出す事が出來るのである。卽ち、ヴォルフは、Logica § 885 not. で「初等算術も、幾何も又、綜合的である[四]」と明言している。かくして、原理的にも、ヴォルフでは、本質的眞理と、偶然的眞理の區分の意味は、成立し得なくなつたと見るべきであろう。

さて、周知の如く、ライプニッツは、觀念と認識の識別と基準[五]を明晰、判明にして、なおかつ、直觀的 intuitiva（十全adaequate）な認識に求め、これらを、不明、混亂、符號的 symbolica（不十全 inadaequate）な認識と對置して考えている。

これと比較してみるとヴォルフは、不明 obscura、混亂 confusa に對し、明晰 clara、判明 distincta な概念 notio という事を、プロレゴメナ及び論理學でいつて居り、直觀的判斷の述語が事物の徵標 notae である場合、直ちに、その事物の

概念は判明だと述べている點で（Logica § 671）ライプニッツを受けついでい乍ら、ライプニッツの樣に、直觀的、或いは、符號的なるが故に、十全、或いは不十全というようなことは、私の知る限りでは、どこにもいつておらず、概念が判明だという事のため、十分な徵標 sufficiens notae が算え上げらるべし（Logica § 952）という意味で、十分という語を用いている。即ち、ヴォルフは、ライプニッツの樣に、直觀的ならざる符號的認識を、直ちに不十全な認識といい切るのではなく、今直ぐ直觀的でなくとも、即ち符號的なものでも、徵標が、十分に sufficienter 算え上げられている事が吟味された曉には、完全な定義と考えた（ibid.）點に於いて、ライプニッツと、見解を全く異にするものといえよう。ライプニッツは名目的定義は豫め、その定義されている事象が可能である（即ち實在的である）事を明かにして置かない限り完全な學にとつて不十全なものである」（G. IV.423）と一方でのべ、つづいて、徵標の列擧可能な判明なものに、名目的定義 definitio nominalis をあてておきな乍ら、一方、直觀的な（十全な）ものこそ始めて、最も完全認識として實在的なる定義 definitio realis だと區別して考えているという事は自己矛盾ではないか。名目的定義が、もはや、單に名目的定義ではなくなくて、實在的定義たりうる時にのみ、名目的定義たりうるという事となり、これは明らかに定義の惡循環と軌を一にする自己矛盾である。かかる自己矛盾を。豫め克服する事が要求されるライプニッツの定義の說は、いたづらに、定義についての理想像をえがき、その前に、しり込みするばかりである。彼は「確かに、十全な認識を得る時は、いつもアプリオリに可能性の認識を得る。然し概念の完全な分析が一體人間に出來るものかどうか、人間はその認識を神の絕對的屬性即ち、第一原因、及び、事物の窮極原因に還元しうるかどうかは、敢えて、決定せずにおこう」（G. IV. 425）と語り、「數の概念は、最も完全な認識に近いが、實在的定義の完全な例を人間が示しうるかどうか私は知らない」（G. IV 423）と極めて消極的な態度を餘儀なくされている。

一方、ヴォルフにとつて、かかる自己矛盾は、豫め克服さるべきものでなく、定義の理論と、實踐とを經て、方法論的に解消されるという道が選ばれた。即ち、「定義されるものが、可能かどうかが、定義でわからない」（Logica. § 193）如き名目的定義から、「定義されるものが、如何にして可能かを明かにするその仕方を說明する」（Logica § 194）實在的定義を、如何にして導き出すかという、導出方法こそ、最大の課題となつたのであつて、この課題に答えんとするものとして、定義の眞實性の吟味の努力が、即ち、ライプニッツが十全といい切る符號的な名目的定義も、すべていつかは、直觀的な實在的定義たりうるという事の證明が、「名目的定義は、すべて、可能性のうちにある」（Logica § 1141）というヴォルフの定義の說の結末に向つて集中するのである。

單純概念の定義不可能性を認める處から彼の定義の說を出發させているライプニッツが右の如き弱氣な態度を示し、定義の完全な例を示し得ないといつた事は、十分了解され得るであろ

う。先に明らかにされた如く、これに反して、すべての概念定義を認めるのがヴォルフの立場とすれば、彼にとつて、すべての名目的定義から實在的定義を演繹する事の可能性の證明の强氣な樂觀說こそ、自己を救う唯一の道であつたと云い得よう。と同時に、これは又ライプニッツの自己矛盾をも救う方法でもあつた事は、已に今我々の指摘した所からも明らかであろう。弱氣なライプニッツに對して、强氣の徹底性の道は、果してどこまで可能であるか。この點を我々は次に吟味せねばならぬ。

註　(一)　Logica § 551 Modi ex definitione exulare debent. 參照。樣相そのものを、定義から徐外するという事は、原因樣相と關係の可能性を省略することではなくて、主外的原因 ratis extrinseca を省略する事を意味するものである。從つて、この主外的原因の問題は、根據論 Grund Lehre としての存在論 Ontologia で、主外的根據への考察として、論議の場所を得ている (Ontologia § 160 ; Modorum ratic) 參照。

(二)　B. Russell 前揭書 p. 21 參照。

(三)　"Methodo Synthetica……eaque nos quoque utimur in elementis Arithmeticae & Geometricae Latinis."

(四)　G. IV 422～424 (Meditationes de Cognitione, Veritate et Ideis.) 參照。ヴォルフでは、概念 notio にのみ限定して、識別と基準がのべられているが、ここでは、ライプニッツによつて、觀念 Idea と、更に、認識 cognitio について、語られている點は、我々にとつて注目すべき差異である。

五

右に、我々は、定義の說のヴォルフの立場をライプニッツの立場から、その徹底性に於いて敢えて區別したが、この點を拔きにすれば、ヴォルフは自分の定義の說を構成する重要な概念の殆んどすべてをライプニッツから受け繼いでいる事も事實であろう。名目的定義と實在的定義の區別等はヴォルフ自身、表明的に、ライプニッツの區別を賞贊さえしている程である。(一) これらの點のみを見て、人は、或いはヴォルフに誇るべき獨創性はないとさえ極言するかも知れぬ。然し正當にいうならば、ヴォルフはあまりにも獨創的なる師を持つたとさえいい得よう。この點師に一步をゆづるとしても、我々はなお、ヴォルフのライプニッツに見られぬ强氣な樂觀主義に示される徹底性を、彼の定義可能性の證明の原理の問題を中心に檢討する必要があると思う。

ヴォルフの實例による說明に從つて、我々は、これから、先づ、ヴォルフの定義可能の立場を吟味してゆくのであるが、徹底せるヴォルフは、弱氣なライプニッツと異なり、尠くとも人間の示しうる完全な定義の模範を、先づ初等幾何の圖形に見出す事が出來るときつぱりいゝ切つている。卽ち、「初等幾何の圖形は論理學の初心者に判明な概念の形成に練習をつむ手がかりそのものを明示する」(Logica § 671) と。この理由は一體どういう事なのであろう。

彼自身の具體的說明を要約してゆくと、先づ後驗的概念の形成につき述べている章（Logica § 669～§709）中で、我々は、正方形の三つの徵標を形成するのに、正方形を觀察して三つの直觀的判斷、卽ち、一、正方形は四邊を持つ事。二、正方形の各邊は、互に相等しい。三、正方形の各角は事實直角である、を、正方形の三つの述語として形成するという實例を擧げている。（Logica § 671）而も、正方形を認識し、如何なる他の圖形からも區別するのに、これらの判斷は役立つのであり、卽ち、これらの述語が事物の徵標であり、これらの直觀的判斷に基いて我々は相互に三つの述語づけを區別しているのであるから、我々はここに、正方形の判明な概念を自ら形成しているのである、（同所）と初等幾何の圖形に判明な概念形成の練習場を求める理由を說明している。

從つて、この練習を積んでおけば、更に進んで、愈々我々が名目的定義の眞實性の吟味 veritatis definitionum examen をなす場合（Logica § 949）役立つ事となる譯である。卽ち、「同じ主辭に、同時に內在しうるものとむすびついているのでなければ、概念は眞ではないし、定義は眞に概念の數の中に數えられないのであるから、果して已にに認められた事物の間に、或いは、今や感覺にさらされている事物の間に、定義の中に含まれている事が內在して現われているかどうか、或いは、この可能性が間接的に證明されうるや否や、を尋ねる」場合に役立つのである。これ卽ち、ヴォルフのいう「徵標が定義に於いて、必要にして充分なものとして算え上げられているかどうかが、後驗的に明白になるよう、吟味さるべき」後驗的吟味（Logice § 952）に屬する事柄であつて、正方形の缺陷ある名目的定義として、我々が、等邊たるべし、四邊たるべし、という定義を持つならば、その徵標は、菱形にも適合してしまう事を後驗的に吟味しうる譯であるという實例を、ヴォルフは擧げている。

然し眞なる實例の、このような徵標の直觀的、後驗的な吟味による判明な名目的定義の形成は、先驗的な可能性の證明による實在的定義が形成されるまでの、なぐさめの處置だと述べ（Logica § 949）一方でヴォルフは、§ 710～§ 742 で、先驗的定義の形成について述べ、更に進んで、定義可能性の證明の方法、卽ち、先驗的な吟味の方法を定義の眞實性の吟味として主張するに到つている。（Lo-gica § 949）

名目的定義の實存可能性の先驗的な證明の原理の例として、正方形の名目的定義が實在的定義たりうるために證明さるべき原理は、四頂點が圓周上に在る事、或いは、一邊の對角線に對する割合が $1:\sqrt{2}$ だという性質、を擧げている。（Logica §952）これらの原理は、名目的定義と公理とから先驗的に演繹される結論である事は已に Logica § 551 で、樣相の例を用いて示されて居り、又、§ 958 に於いて平行四邊形、樣相第の場合を例にとつて、シエマ schema 化されている。[cii] 平行四邊形 ABCD の名目的定義、卽ち、BA//DC BC//AD の場合は、∠BAD＝∠BCD という事が證明さるべき原理として演繹されて居り、樣相の名目的定義、卽ち、樣相は存在に內在する可變的なものであるという場合は、樣相は定義から徐外さるべきであり、定

義を始める事が出來ない、という原理が、演繹されている。

然し、そもそもひるがえつて考えて見るならば、此の一見先驗的演繹にも、所與の名目的定義から、實在的定義を探求する方法、(Logica § 734. Modus investigandi definitiones reales ex dati nominalibus.) として、彼が次に要約して語る處によつて明かな如く、直觀的後驗的吟味がくい込んでいる事を見逃してはならぬであろう。(三) 卽ち、彼は、そこで、「一、名目的定義から成り立ち得るそれだけの範圍の直觀的判斷が形成される。二、定義されたものが、作圖出來るために、一體どれだけの直觀的判斷が成立たねばならぬかの結論に到達する。三、この直觀的判斷の中に、事物の作圖に必要で、それから出發しうるような判斷が果してあるかどうかを見るために、かつて我々が認識した事物を記憶によびさまさねばならぬ」とのべているのである。

この點に關聯して、就中、我々は、ヴォルフが、定義の眞實の判定を何時までのばすべきかという課題を提出し、これに答えんがために、あくまでも後驗的吟味を媒介として、先驗的な定義可能性の證明がすむまでは、という條件を提出し、前者に分析法 methodus analytica (發見法 methodus inventioni)、後者に綜合法 methodus syntheica (構成法 methodus compositionis) をあわせ考える、混合法 methodus mixta を提案している點に注目すべきであろう。(四) さて、ところが一方、ライプニッツはこの問題につき「事物の可能性を我々は、先驗的にか、又は、後驗的に知る。例えば、その事物がどういう風に作られ

るかという仕方を理解する場合は、アプリオリな場合の一例であり (ライプニッツはこれを因果的定義という)、事物が、現實に實在する事を經驗によつて知る時は、アポステリオリに知るのである」(五) と語り、兩方法を、全く別の場合として、區別して考えているが、これに對して、ヴォルフでは、兩方法は決して別々のものではなくて、定義可能性の先驗的な證明が、後驗的な直觀的吟味を媒介する處に、混合法が働らく場所が見出されると考えられる。これ卽ち、「名目的定義から實在的定義が導き出されうるならば、定義の吟味も又成就されることとなる」と彼により語られる所以であろう。

彼が、混合法による前進と語る (Logica § 946) 處に、右の如くして、我々は定義の辨證法的實踐を豫想するとして、それは果して實際どこまで可能なのであろうか。

さきに指摘した如き、初等幾何の名目的定義の可能性の證明の結果得られる原理は、正にその圖形の作圖を可能ならしめる實在的定義にほかならなかつた。卽ち、正方形、平行四邊形が何であるかを眞に知つている人は、よくこれらの圖形を作圖しうる人でなければならなかつたのである。ヴォルフに於いてはこの作圖に習熟する辨證法的實踐を通じて以外、眞なる定義に到る道はあり得なかつたとさえ考えられるのである。

ところで、徹底せる彼の立場では、定義の可能性の證明は、單に初等幾何の圖形にのみとどまるものかどうかが問題となろう。尠くともヴォルフにとつては、方法論的にそれにとどまるものでなかつた事を我々は知らねばならない。さきに我々が指

摘した樣相の場合にも圖形の場合と同樣、先驗的證明がなされた事をここで我々は想起せねばならぬ。今や我々は、正方形の場合と同樣に、眞に樣相の定義がわかつている者は、「樣相は可變的なものである」と憶えている人ではなくて、實際「樣相を事物の定義にあやまつて用いない」人でなければならぬと、いいうるであろう。此事は又、彼が、結婚の定義をさえなしている點に於いても又いいうる事であろう。彼は、「結婚は子孫を生み教育せんがために、決意された男女間の結合により定義される時、この定義を應用して、二人の人物の間に結婚が行われたと實證せんとする人は、次の三つの事を示さねばならぬ。一、一人の男と一人の女が、二、子孫を生んで、三、教育をせんがために、四、結合を結んだ」と述べている。(Logica § 947 not.) 正にヴォルフの定義の說の立場にあつては、このような結婚を、人間の結婚に於いて觀察し、直觀し得ると同時に、自らの生に於いて生き得た者こそ、結婚の定義を知れるものといいうるであろう。

とすれば、初等幾何の圖形の場合、後驗的直觀による名目的定義を媒介として、先驗的原理を演繹する事は、机上の堆論に於いて、嚴密に可能であつたに反し、結婚の場合には、若し假りにこのヴォルフの結婚の定義があるべき結婚の原理とするにせよ、この演繹が、人生の具體的な生活に於ける複雜多樣な直觀的認識を媒介とせねば可能でなかつた事が、逆に推察されるのである。後者は形式的嚴密さを持ち得ても、前者の如く量的嚴密さを保つ事は出來ない。兩者の困難さの差は極めて大きいといわねばならぬ。この困難な演繹は何時完成されうるといい切れるか。然し如何に困難とはいえ、遂に到達され得ないとはいい切れないであろう。

結論的にそもそも、右に我々によつて見出されたヴォルフの定義の說が、經驗的吟味を媒介とする先驗的證明であつたとするならば、このような先驗的證明が、眞に先驗的證明の名に値いするや否やを問う事は、單に言葉の遊戲に過ぎぬであろうか。然しヴォルフは、この自己矛盾からの脫出に、尠くとも存在論に於いては成功していると豫想されるのである。卽ち、ヴォルフの定義の實例から抽象的概念（先驗的概念）程、證明が容易であり（例えば、樣相 modus の名目的定義の如何に抽象的なることが）、一方、具體的概念（後驗的概念）程、證明が困難である（例えば結婚の場合）事は、右に我々の見た所であるが、ところが「存在論に於いては、あたう限り抽象的な概念、卽ち、存在一般に妥當な概念が解明される」(Ontologia § 26) のである以上、彼の學的存在論構成に必要な概念の定義可能性の證明に、ヴォルフの定義の說は事缺かないと考えられるのである。

先に指摘した「すべての名目的定義が可能性の中にある」という結論的陳述 (Logica § 1141) が、全く徹底せるヴォルフの立場を如實に實證するものといいうる爲には、定義の對象が、存在論の用語に限定さるべしという限定を我々は與えねばならぬと思うのである。「定義されないものには矛盾がある」(Logica § 303) というヴォルフの言葉は此の間の事狀を裏書きし

ているといえないであろうか。

我々はここで存在論の概念の吟味を行うべき場所ではないが、ただヴォルフに於いてもはや定義不可能性をこれ以上論ずる事の無意味さを見出し得た事を以つて滿足せねばならぬ。と同時に我々はヴォルフの混合法の最深の根據についての問いを、次に、問うべきであろう。

註 (一) Logica § 191 not.「例えば、若し圓の定義が、その上の各點が、ある中にある一點から等距離にある如き自分にもどつてくる線によつて限定される平面だとなされるならば、この圓の定義は名目的だ。從つて言語は心が無いという考えがこの定義に匹敵する。更に、若し、その圓が、平面上に固定された一點の周わりに於ける直線の運動によつてえがかれた圖により定義されるならば、この時定義は實在的である。この名目的定義と實在的定義の違いをライプニッツは一六八四年のアクティスの五四〇頁 (G. IV S. 424～425 を指す) で教えた。一般には、せつかくの言葉が幾分違つて受けとられている」參照。

(二) Logica § 958 not. 參照。

I Ubi demonstrandum, in parallelogrammo ABCD angulos diametraliter oppositos o (∠BAD) & x(∠BCD) inter se aequales esse ; schema tale est :

BA & DC sunt inter se parallelae, per hyp.(y = ∠*ADC*)

BC & AD sunt inter se parallelae, per hyp.

Angnli o & y sunt duobus rektis aepuales.

Angnli y & x sunt duobus rektis aequales.

Angnli o & y sunt aequales an gulis y & x simul.

Angulos o aepualis est angulo x

II Ubi demonstrandum, modos definitionem ingredi non posse ; schenca tale prodit :

Modi sunt mutadiles per def.

Modi constanter non insunt (*Axioma*)

Modi rebus cognoscendis & a se invicem discernedis non inserviunt. (*Definitio*)

Modi ex notarum numero excludendi.

Modi ex definitioue exulare debent, esn eam ingredi nepueunt.

(三) 最も純粋な初等幾何の公理の認識にも、經驗的認識 (ヴォルフは歴史的認識 cognitio historica と呼んでいる) が基礎を提供しているという考えは Praelim. Disc § 12 でも述べられている。

(四) Logica § 836～§ 958 (De dijudicandis libris dogmaticis) の中、就中 § 949 not. : (……Exempla vera veritatem defimitionum a posteriori loquuntur & ubi methodo analytica, vel mita procedimus,……in quo condendo mixta usi sumus methodo.) § 953 參照。特に混合法については、§ 349 § 949 § 885 參照。

(五) G. IV S. 424, 425 參照。

（六） ヴォルフの定義は概念からの無の追放として、第三節で結論的に豫想されたが、この追放に實際、彼の力說する混合法が如何なる規定を與えたかについては、等邊四角形という上述の正方形の名目的定義の場合でも明らかな如く、先づ後驗的吟味により、無の發見、卽ち、等角という徵標の缺如の發見となり、次に先驗的吟味により、前者で發見された無の追放（概念の充實）の原理の確立、卽ち、四頂點が圓周上にあるべき事、或いは、一邊の對角線に對する割合が $1:\sqrt{2}$ たるべしという事となる。

六

ヴォルフは、かつて存在論の序文で、デカルトが存在論の用語は定義されるよりも、直觀的に、より正しく了解されるという理由で、存在論の用語の定義の不必要性を公言した點を攻擊して、デカルトの第一哲學輕視の立場を非難したが、[1] 今や右に見て來た如く、ヴォルフは、自ら、この概念定義の可能性を、Logica に於いて追究したと見られる。然し已に我々の吟味の結果、彼に於いて、先驗的證明が直觀的吟味を媒介とせねばならぬ事が指摘された。とすれば定義の說に於いて重大な役割を果す直觀そのものは、定義され得ぬものはないとするヴォルフに於いて、如何に定義されたのか。我々は Logica では、直觀そのものについてのヴォルフの定義を見出し得ない。然し、Metaphysick に於いては、直觀を符號的認識と區別して次の如く說述しているのを見出す。[2] 言語とか、記號によつて事物を表象する場合を符號的認識といい、事物を、事物そのものによつて表現する場合を直觀的認識 cognitio intuitiva というとのべ、不在の人を回想して、その人の像が目前に浮ぶ時、その人そのものを表象するのだ、として、表象の一つの場合として、直觀を定義しているにすぎない。勿論ヴォルフの場合結論的には直觀は表象說を通じて存在の原理に基礎づけられるのであつてとすれば、直觀の吟味は表象說の存在論的吟味以後の事でなければならないという事となる。

今の處は、ひるがえつて、考えてみると、名目的定義の眞實性の吟味については、「同じ主辭に同時に內在しうるものへと結論されるのでなければ、定義は、眞なる概念の數の中に入れられない」(Logica § 949) と語られる以上、ここに明らかに、無矛盾性が定義可能性の必要條件として示唆されているのを我々は見出し得よう。されば、後驗的吟味としての直觀の役割りは、事物に矛盾なく內在し得る徵標の兩立實存の選擇であつたと考えられる。(Logica § 671 參照) かかる定義の吟味は、單なる定義可能性ではなく、その實存可能性でなければならなかつた。此爲には單に矛盾がないという事ばかりでなく、定義の實存のための充分な理由を根源的に必要とした豫想される。とすれば、後驗的吟味に於ける直觀そのものの役割りについて、これ以上の說明を Logica で見出せないとしても、ヴォルフの意味する直觀の根柢には、無矛盾性以上に、この實存の充足理由が存在しておつたのではないかと豫想される。直觀的認識はさきに見た如く、幾何學の圖形によつて判明な概念形成の練習

の場合に有用性を持つものであつても、原理的にはヴォルフの一つの弱點としての表現說の中に原理と、充足理由の原理とに根據づけられる現存在の精神作用の說として、ヴォルフ研究其の三で明らかにされるであろうから。こゝに於いて我々は定義の實存にも、理由の原理を矛盾律と共に豫想する。此事は同時に、先驗的證明可能性の根柢にも又兩原理の存在を豫想するものなのである。可能性そのものについての吟味はここでなさるべくもない。今はただ、このような豫想に基いて Logica にあらわれた限りの意味に於ける充足理由の原理の吟味を次に行なう事で滿足すべきであろう。

上述した處から我々は、辨證法としての混合法の根存に、矛盾の原理と理由の原理との結合、がしのび込んでいるのを見た。ここに見られる無限の可能性と現實性との結合は、次に神と充足理由との結合として、一層判明なものとなるであろう。此事は同時に、ヴォルフの混合法成立の最深の根據への問いの解答を與えるであろう。

ショーペンハウエルは、彼の充足根據についての有名な論文のヴォルフについての項で、充足理由について、ヴォルフの Logica で語られるのを知らないと述べているが、(三) 果してそうであろうか。成程、ヴォフルは、たとえおもて立つた仕方では、存在論からの借りものの原理を取扱つていないにせよ、右の我々の結論的な豫想に從つて、Logica のどこかに、充足理由についての敍述があるものと考え、檢討してゆくと、De dijudicandis libris dogmaticis なる部の第一章 § 836、定義に於いて加剩なものの累積からとりのぞくべき不都合さの註で、充足理由の原理が、定義可能性の最深の根據として敍述されている樣を、我我は見出す事が出來るのである。次の重要な陳述を、ショーペンハウエルは見逃したとしか思えない。そこでヴォルフはこうのべている。卽ち、「先立つものにより、定義を始める用語を充分に說明するばかりでなく、定義の現實性について何らの疑惑が殘つていないような仕方で存在が與えられる事を證明せんがために、私は、神の名目的定義をなさんとする者として、神を、この宇宙がたまたまこういう風に實存するという充分な理由を自分自身の中に含む存在そのものというい方で定義した。……いわば、證明の原理として定義を使用しうる以前に、この定義の實存性を證明せんとする者は、定義に於いて累積されている事が、互に矛盾しないで當の存在に適合しうる事を證明せねばならぬ。それ故、宇宙の偶然性と充足理由の原理からこの事は結論されるが故に、神が存在そのものとして與えられて居り、宇宙の實存の充分な理由が、その神の中に含まれている事が私によつて、かように示された」と。

ここにヴォルフは、定義可能性の最深の根據を、充足理由をそれ自身の中にもつ神の存在として、認識の原理としての充足理由の原理と存在の原理としての充足理由の原理の同一性に於いて指摘している譯である。我々はさきに、第三節で、ヴォルフの定義の說の辨證法の出發點を（存在の原理＝認識の原理）＝（矛盾の原理）という圖式として見出したが、今やこの圖式に更に（存在の原理認識の原理）＝（理由の原理）＝神、が等

置さるべきあつた事を知るのである。そもそもライプニッツに於いては、矛盾の原理と、充足理由の原理とは、周知の如く、峻別せられ、對置されたのであるが（G. VI,S. 612）、これに反して、ヴォルフでは、矛盾の原理からの理由の原理の演繹が、理由の原理の證明として、存在論で企圖されている（Ontologia § 71）。この限りは、（存在の原理＝認識の原理）＝（矛盾の原理＝充足理由の原理）＝神、という圖式が豫備的了解として成り立つ。然し今見た如く論理學に於いては逆に充足理由の原理が矛盾の原理の前提としてのべられているのである。「AがAでないものでない」といゝうるためには、AがAである理由があつての事でそういわれるのは理の當然であり、この限り、充足理由の原理が論理的に矛盾の原理に先行し乍らも、存在的には、矛盾の原理と同一の事柄についての言表である事にはかわりはないであろう。このように、論理的には矛盾の原理の前提をなすと思われる充足理由の原理をヴォルフが存在論で、矛盾の原理から導出する事も又うなづけるが、その是非はヴォルフ研究其三で問うべき場所を持つであろう。然し我々は、今、ヴォルフに、かかる企圖のあつたという事實に基いてヴォルフの矛盾を救う道を豫想する事で充分であろう。即ち、今少し詳說すれば、有限な人間に於いてもともと峻別さるべき存在と認識が、原理的に、右の如く同一とされる如き、そのような同一性の成立可能な場所として、充足理由を持つた神をヴォルフは見出したと、敢ていう事によつて、ヴォルフの立場は、原理的に救われ得るのではないであろうか。此の我々の、神の場所說をヴォルフに見る事の裏づけとしては、嘗てライプニッツが、充足理由の原理で、神を證明する事が先だと、一方的に述べている（G. VI S. 75）に對して、ヴォルフによつては、一方、「神的な實存と豫知の論推を充足理由の原理の中に解消し、一方、同原理の眞實性を神的實在と豫知により構築する」事は、神か、充足理由の原理か、いづれが先かと、論理的優先性を問題とする論理學の初心者の陷る惡循環だと指摘され、兩者の相補關係を是認すべき事の必要性が强調されている。（Ontologia § 75 not.）即ち、充足理由の原理とのこのような相補關係により、始めて神は、充足理由の原理を通じて右の如き場所となりうると考えられるのである。

我々はここで、今後のヴォルフ存在論研究のためには、存在の原理と、認識の原理の同一性とに出發點を持つ辨證法を、又、彼の神學の考察のためには、神についての場所說を豫備的了解として提出しうると思うのである。

なお又、ふりかえつて考えてみると、特に、單純概念の場合、概念的對象把揚に對するベルグソンの非難[註]が當時存在しておれば、直觀の立場を媒介とするヴォルフの立場によつて反駁されたかもしれない。若しそうだつたとすれば、恐らくヴォルフは直觀についての分析をカント以上の優れた仕方で行つていたのではなかろうか。又一方、ライプニッツは、現象即物自體、と考えたというカントのライプニッツヴォルフ學說の批判は、尠くともヴォルフの定義の說には、不當であり當然ヴォルフによつて反駁されたであろう。何となれば、ヴォルフにとつて後驗

的直觀によつて認識される現象は、決してそのまま、手放しで、認識の原理として受け入れられるのではなく、先驗的證明を得て始めて實在性を持ち得たが故である。かかるヴォルフの先驗的概念證明の眞意を見逃したカントには、ヴォルフの定義は永遠な惡循環におち入ると考えられ、かかる解釋が、カントを不可知論の前に立たせたと見られる。いづれにせよ、ヴォルフの定義の說が、後驗的證明を媒介として、先驗的證明を窮極的に必要としたという事は、一方に於いて、ライプニッツに對して、カントの綜合判斷への一歩前進であつたと共に、存在の原理と認識の原理の同一性の原理的自覺に基く混合法を通じて、概念哲學の完成者ヘーゲルの段階に、カントを越えてつながるものと考えられる。

ここでは、ヴォルフの自由の說について論ずべき場所ではないが、ヴォルフは、何が眞と見え、何が僞を見えるかを公然と語る事を哲學の自由だと述べ、それには、與えられたるものを、定義し、判斷し、證明する事だと語つている。(Disc. praelim. §15) 結論的に云つて、ライプニッツが定義出來ない單純概念の假定から出發したのと對照的に、ヴォルフは、定義出來ぬ自明なものの定義をこそ哲學の課題となし、Logica の定義の說で、定義可能性の證明問題として、これをとりあげ、尠くとも、存在論の豫備的な仕事となしたのである。實に定義こそは哲學する自由の先づ第一の仕事であるとヴォルフによつて語られる所以は、この點にあつたのであろう。

註(一) Oniologia Praefatio. 及び、哲學研究、四五〇號所載、拙稿、「クリスチャン・ヴォルフの哲學用語についての第三節、參照。

(二) Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt. (Metaphysick) : § 316. Unterscheid der figürlichen und anschauenden Erkäntniß. 參照。

(三) Schopenhaner ; Sämtliche Werke, Erster, Band., Ueber die vierfache. Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde. Zueites Kapitel. § 10. Wolbb の項 (s. 18 ~s. 19) 參照。「然しヴォルフは、現在に見る如く、此の充足根據の原理を、論理學で提示したのではなく、依然として實體論で說いてをるに過ぎぬ」(河合哲雄譯、三五頁)

(四) Bergson : Irtrodnction à la metaphysique.「概念は、之に反して、殊にそれらが單純であれば、それが象徵する對象の代りに取代えられた眞實の象徵であるという不利を有つて居り、そうして我等に何等努力を要求しない」(廣瀨哲士譯、八一頁)

(五) Kant : Kriiik der reinen Vernunft. S. 317~S. 329, 參照。特に、"Leibnitz nahm die Erscheinungen als Dinge an sich selbst,……" (S. 319)

(筆者　關西大學文學部〔哲學〕講師)

machen.

3. Der Prozeß der Verfassung. Es ist leicht zu sehen, daß die Darstellung der „Phänomenologie des Geistes“ eine Scheidung in zwei ungleiche Hälften verrät, nämlich zwischen „C. (AA.) Vernunft“ und „(BB.) der Geist“; hier unterbrach auch Hegel einige Zeit lang seine Absicht. Dieser Umstand hängt mit einem Streit mit seinem Verleger, Joseph Anton Göbhardt, zusammen, zugleich aber enthält er ein Problem in sich, das, wie Haering meint, die Komposition der „Phänomenologie“ selbst und darum auch ihre Auslegung angeht. Auch der Titel „Phänomenologie des Geistes“ wurde aller Wahrscheinlichkeit nach an dieser Zeit festgesetzt. Diese Verhältnisse habe ich einigermaßen aufzuklären versucht.

4. Gegen Haerings „Entstehungsgeschichte“ verfechtete H. Glockner „die phänomenologische Krisis“ als die Grundlage der Verfassung der „Phänomenologie“. Ich habe seine These im Zusammenhang mit der Ansicht Haerings beurteilt.

5. Zuletzt sind über die Vollendung der „Phänomenologie“, die Sagen darüber, die Bearbeitung der Vorrede, die Veröffentlichung des Werkes und die Beurteilung des damaligen Publikums erzählt.

* For the Japanese original of this article, see Vol. XLI, No. 1, & No. 2.

On Christian Wolff's Theory of Definition.

—A Study of the Philosophy of Wolff, No. 2—

by Tadasu Hosokawa

We have already seen that Wolff to think fundamental notions as to be clear and distinct faces us to the difficult conclusion: „notions must be proved“. (See my argument at The Journal of Philosophical Studies, Vol. XXXIX No. 4 P. 74.)

Our arguments, then, are as follows.

1) When the notions consisting the foundation of Ontologia artificialis must be proved, without the proof-needless basic notions, the more we will prove any notions the more we shall need the more basic notions forever. Now we must find out the vicious circle in the definition itself.

2) For saving this vicious circle at Ontologia, theproblem of the possidi lity of definition must be proved before Ontologia, except Ontologia. In this point there is the reason why the place of the theory of definition must be in Logica by Wolff.

3) Firstly by finding out the dialectic of definition in Logica, we examine whether we save the above vicious circle. Then at the ground of his dialectic of definition there is not the confusion of the principles of being anb knowledge as the popular saying, but the identity of both principles.

4) When we secondary examine the Wolff's division of definitions, we shall find out Wolff's radicalism by which he must be distinguished from Leibniz at the point to regard the division of the nominal definition nad real definition more important than that of the essencial and accidental definition.

5) Thirdly when Wolff attempt to deduce the real definition from the nominal definition as the principal test of reality of the definition, we must principally reflect the possibility of this deduction and then determine the usefull range of à priori proof of the existence-possibility of the nominal definition regarding to the ontological notions.

6) At last in Logica as the most deepest ground of definition-possibility we find out Wolff's saying regard to the principle of sufficient reason which even Schopenhauer had missed seeing in Logica. Here we understand the principle of sufficient reason as prior to the principle of contradiction. But this Wolff's behaviour in Logica contradicts his deduction of the principle of sufficient reason from that of contradiction in Ontologia. In conclusion for saving this contradiction, we presuppose the next equalities and at the same time God shall be placed as the place in which the equalities are possible.

(the principle of being=that of knowledge)≡

(the principle of contradiction=that of sufficient reason)≡God